

肥後金工⑦ 肥後拵の魅力—透かし鐔—

細川三斎と八代

細川忠興^{ただおき}は、永禄6年（1563）細川藤孝^{ふじたか ゆうさい}（幽斎）の長男として生まれました。妻は明智光秀^{あけちみつひで}の娘・玉（ガラシャ）です。忠興は隠居剃髪後、三斎宗立^{いんきよていはつご そりゅう}と名乗りました。寛永9年（1632）国替で息子の忠利が肥後熊本藩主となり、三斎は中津（現大分県中津市）から八代城に移り住み、正保2年（1645）、八代城北の丸で亡くなりました。三斎について八代に来た平田彦三^{ひらたひこそう}、彦三の弟子西垣勘四郎^{にしがきかんしろう}、彦三の甥志水仁兵衛^{しみずじんべえ}ら金工職人によって、肥後金工が発展しました。

細川三斎と肥後拵

すぐれた武将であり、茶の湯をはじめ、和歌・能楽・絵画に通じた文化人であった三斎の美意識は、武具や刀装具のデザインにも発揮され、三斎が好んだスタイルが細川家の御家流として尊重されました。このうち、有名なのが「信長拵^{のぶながこしらえ}」と「歌仙拵^{かせんこしらえ}」です。「信長拵」は加賀の刀工信長作の刀を納めた拵で、当初ものは現存しません。一方、「歌仙拵」は、関の刀工兼定作の刀を納める拵で、三斎が八代城在城の折、奸臣6名（36名とも）を成敗したという言い伝えから、六歌仙（三十六歌仙）にちなんでその名があるといわれています。いずれの拵も、柄は黒漆塗の鮫皮の上に燻革^{ふすべがわ}を巻き、縁にも革を被せ、鞘は黒漆塗の鮫皮を研ぎ出し、よく鍛えられた鉄地の透鐔^{すかしつば}をかけています。一見地味ながら、凝った細工と武将好みらしい豪放^{ごうほう}さが発揮されており、肥後拵の代表といわれています。



肥後拵の特徴

肥後拵とは、肥後で作られた金具を用いて制作された拵の総称です。三斎が考案し好んだ拵を模範としたものが代表的で、柄の長さが全長に対して短い、柄頭や鐔^{こじり}が締まって形がよい、鯉口と栗形の間が狭いなどの特徴を備えています。これらは片手でも扱いやすく、実戦上の経験に基づいて行き着いた形ともいわれています。

こうした特徴は、豊臣秀吉所用の「金蛭巻朱塗大小拵」（桃山時代・東京国立博物館所蔵）や結城秀康所用の「朱漆打刀拵」（桃山時代・東京国立博物館所蔵）などに原形を見ることができ、三斎が生きた時代に流行ったスタイルの中から、自分好みの形を選び取っていったことがうかがえます。

肥後掬の魅力 ～透かし鐺～

今回の展示は、肥後掬の魅力のひとつである鐺のうち、透かし彫りの技術を用いた透すかしつば鐺の魅力にせまります。

1543年（天文12年）種子島たねがしまに鉄炮（火縄銃）が伝来し、やがて国内でもその生産が行われるようになりました。鉄炮の二大産地に堺と国友村（現在の滋賀県）がありますが、鉄炮をつくる鍛冶職人かじしよくにんを抱える武将もいました。

尾張おわり（現在の愛知県）出身で豊臣秀吉に仕えた加藤清正もそのひとりでした。鉄炮鍛冶として加藤氏に仕え、父は尾張出身と伝えられる林又七（1605頃～91頃）は、のちに細川氏に仕え、鐺などの刀装金具の製作に腕をふるいました。

又七の父の故郷尾張は、地鉄の強さと透かし彫りを旨とする尾張鐺おわりつばの産地であり、また京都には、洗練された図柄を透かし彫りにする京透鐺きょうすかしつばや布目象嵌（布目状に彫った溝に、金の薄片を打ち付けて定着させる）の技法を用いた正阿弥鐺しょうあみつばがありました。

又七の鐺にみられる、よく鍛えられた地鉄を透かし彫りにし、布目象嵌による文様をほどこす、という特長はこのあたりに由来するようです。その伝統は肥後象眼ひごぞうがんとして現代まで受け継がれています。

桜九曜紋象嵌鉄炮 林重勝作（17世紀）本館蔵（未展示）

林又七の兄重勝作の鉄炮の銃身です。細川家の九曜紋と桜紋が象嵌されています。鉄炮製作でつちかわれた高度な技術が、透かし鐺の製作に活かされました。

